

紹介

Saun Toughter,

Julian the Apostate

本書は、エディンバラ大学出版局から二〇〇四年に公刊が始まった「古代史の議論と史料」(Debates and Documents in Ancient History) シリーズの二冊目。表題の通り、「背教者」と称された四世紀中葉のローマ皇帝ユリアヌスを扱う。著者は英国・カーディフ大学の講師で、マケドニア朝期のビザンツ帝国や宦官の研究でも知られる。

ユリアヌスといえば、そのドラマティックな生涯を描いた辻邦生氏の名編『背教者ユリアヌス』から大きな感銘を受けた人も少なくないであろう。しかし、この短命な皇帝の不思議な魅力にひきつけられてきたのは何も小説家や詩人だけではない。多くの歴史家もまた然りなのである。

さて、本書第一部は議論編で、その序論はすばり「ユリアヌスの魅力」と題される。

著者によれば、それはキリスト教に対抗した「最後の異教徒皇帝」という宗教的理由、波瀾に満ちた悲劇的生涯、豊富な史料が残存し歴史家たちに多様な解釈を許していること、などに見出されるという。

続く各章で、ユリアヌスの生涯がほぼ時間経過に沿って叙述される。第一章：家系。ユリアヌスの皇帝家への強い帰属意識を強調。第二章：所謂「異教」への転向。ユリアヌスが受けてきた教育に焦点を当てる。第三章：ガリア(現在のフランス)で過ごした副帝時代。ユリアヌスの経歴のなかで最重要との位置づけ。第四章：皇帝ユリアヌスの統治スタイルと改革。彼の問題関心は、四世紀の他の皇帝たちも共有していたと主張。第五章：宗教。統治期間の短さゆえに適切な評価が困難とする。第六章

：ペルシア遠征。その動機・目的・不成功の理由の説明には慎重を期している。結論「ユリアヌスのとらえどころのなさ」は、彼をアレクサンドロス大王やJ・F・ケネディ、ジェームズ・ディーンにも比す。

第二部は史料編である。ユリアヌス自身の書簡や著作、彼の政策を伝える法律史料から始まって、修辭学者リバニオスの書簡、

アンミアヌス・マルケリヌスの歴史書、キリスト教教父ナジアンゾスのグレゴリオスやヨハネス・クリュソストモスらの著作など、関連史料の英訳六二点が、貨幣・立像などの図版五点とともに収録される。

著者は、現代の歴史家にとつても、ユリアヌスは客観視することが難しい人物であると述べる。それゆえ、著者は自説を展開しつつ、しかし異なる解釈をも提示するよう努力したという。詳細な註こそないが、第一部では先行研究が問題としてきた論点が手際よく整理されている(特に第三章)。また、第二部は第一部とのクロス・レファレンスが意図されており、巻頭の系図・地図とともに、読者がユリアヌス理解を深めるうえで好適な道具立てとなっている。

つまり本書の読者は、第一部で提示されるさまざまな見解を自ら斟酌し、第二部の史料編にも目通ししながら、自分自身のユリアヌス像を構築するという魅力的な作業へと誘われるのである。

但し問題点を簡潔に提示しようとしたためか、著者は、時に先行研究をユリアヌスに対して同情的か批判的か、また時に史料を親ユリアヌスか反ユリアヌスかで分けて

しまう。著者のこうした叙述方法が適切であるかどうか、読者は史料の再吟味のみならず、さらに進んでは著者の所説をも含む先行研究の再検討を、各々改めて試みねばならないであろう。

巻末には、ユリアヌスの年譜、より深い理解のための文献案内、小論文設問と練習問題、文献表、索引を附す。文献表は比較的新しいものが中心で、インターネット上の関連サイトも取り上げられているが、その後も新しい研究書が続々公刊されているので最新の研究動向を知るには充分でない。もともと、ユリアヌスのような有名な皇帝について、網羅的な文献リストを期待するのは望蜀かも知れない。

最後に、この「古代史の議論と史料」シリーズの特色のひとつは、小論文設問と練習問題である。本書においても、ユリアヌスについて研究する際の三五の論点が提示されている(一八四—一六頁)。無論、問題がこれによって尽されるということはないであろうが、これからユリアヌス研究を始めようとする者には貴重な指針となるはずである。ちなみに、三五の論点のうちのひとつは次のようなものである。

「なぜユリアヌスは、歴史家にとってこれほど興味深い人物であり続けているのだろうか？」

なぜだろう？本書のページを繰りながら、是非考えてみたい問題である。

(Edinburgh: Edinburgh University Press, 2007, pp. xvi + 201.)

(南雲泰輔 京都大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)

受 贈 誌

(二〇〇八年三月二三日) 二〇〇八年五月二六日)

人文學(同志社大学人文学会) 一八二

文化學年報(同志社大学文化学会) 五七

上海センター研究年報東アジア経済研究

(京都大学大学院経済学研究科附属上海センター) 二〇〇六—

史料 皇學館大學史料編纂所報(皇學館大學史料編纂所) 二二三、二二四

東方學(東方學會) 一一五

立命館文学(立命館大学人文学会) 六〇三、六〇四、六〇五、六〇六

紀要史学(中央大学文学部) 五三

史學雜誌(史學會) 一一七二、三、四

関西学院史学(関西学院大学史学会) 三三五

紀尾井史学(上智大学大学院史学専攻院生会) 二七

経済論叢別冊調査と研究(京都大学経済学会) 三三三

史學(三田史学会) 七六一—

Historia Mexicana (El Colegio De Mexico) 227, 228